

わたし、ガイドじゃないっすヨ

東北 月山、湯殿山 山スキー

藤本（他）

【日時】2007年5月3日（木）～6日（日）

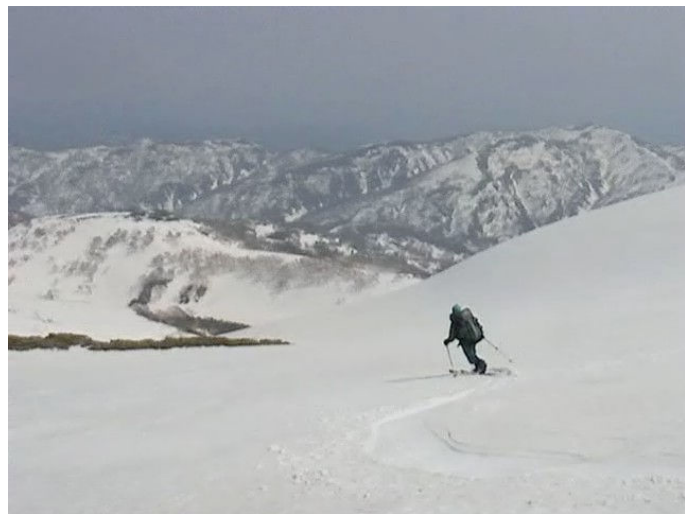
【メンバー】藤本（L）、植島（SL）、片山、渡辺、辻

5/3 晴れ

月山には、学生の頃にゲレンデスキーを持って一度行った事がある。かれこれ20年も前の事だ。確かゴールデンウィーク期間中だったと思うが、すごく天気が良くTシャツで頂上まで登った記憶がある。今回は、連休後半の4日間をたっぷり滑れると共に、私にとって久しぶりの本格的？な山スキーなのでとても楽しみであった。

断続的に渋滞している深夜の東北道を延々と走り続け、朝5時頃に姥沢の駐車場に着く。着いた頃はガラ空きだったが、車中で仮眠をとっていると続々とスキーヤーやボーダーが集まり出し、8時過ぎに起きた頃には車で埋まっていた。朝食や準備を済ませて、9時半頃に出発する。良く晴れており、暑くなりそうだ。リフトで上がってから少しトラバース気味に滑ってシールを付ける。ここから月山頂上まで黙々と登るのみ。

履き慣れない兼用靴と運動不足の体には軽い荷物なのにずしりと堪えてしまい、太股が痠りそうになりながら何とか山頂にたどり着く。頂上附近は、いつもの事らしいがものすごい風で、板をザックに取り付けて歩くと飛ばされそうになる。頂上小屋の陰で小休止をとった後、いよいよ清川行人小屋までの600mの滑走が始まる。



行人小屋へ滑り込む。(渡辺)

「大雪城」と呼ばれる何も障害物がない広大な斜面が、初級者の私にとって適度な斜度で続く。雪質も適度に締まったザラメでザックを背負っていてもとても滑りやすい。しかも、我々以外には誰も視界に入らない。もう、最高～。登りの疲れが一気に吹き飛ばす。藤本リーダーの巧みなルート選択により、随所でビデオ撮影も行いながら小屋に一直線に近づいて行った。

清川行人小屋はとてもきれいで快適な小屋で、トマの間でも評判が高いということだ（6月上旬頃には小屋の側に桜が咲くらしい）。豊田市から来たという山スキーのパーティーが既に寛がれていた。まだ元気の残っている藤本さん、次郎さん、片山さんは、小屋の裏手にある斜面を滑りに出掛ける。日が暮れ出しビールを飲み始めた頃に、大きな

ザックを背負った4人のテレマークパーティーが到着する。何と（私は面識がなかったのだが）浪漫の高桑さん達であった（片山さんの友達もいた）。湯殿山から来たという。お疲れ様である。（記・辻）

【コースタイム】姥沢（9:00）～月山山頂（12:00/30）～行人小屋（14:00）

5月2日 晴れ

夜中、凄まじい風の音に目覚めたりしたが、暖かい小屋の一夜は快適だった。昨日、快適に滑り降りた斜面を今日は黙々と登り返す。今日も天気は良く、

だだっ広い斜面を見ながら、また来られるといいなあと思う。今日は地図上1696m地点のある尾根を滑る予定なので、山頂までは登り返さず、1850m位をトラバースする。尾根に上がるとさすがに風が強く、灌木の影に隠れるように休憩をとった。そこでスキー板を外し、藪を越えると、そこには快適そうな斜面が！昨日の大雪城の斜面と比べたら、傾斜はかなり増すので、初級者の私は怖々と滑り出すが、大丈夫とわかれば後は快適な斜面。それぞれが楽しみながら四谷川源頭へと滑り込む。ここから姥ヶ岳を目指し再び登りとなる。周りは、にわかにな人が多くなり、スキーマー、スノーハイキングを楽しむ人、湯殿山から来たのか白装束の一団もいる。そしてふと振り返れば、先ほど滑った斜面が人影も無く、目の前にドンと位置している。あそこを滑り降りてきた私達は、ここからさぞ格好良く見えていたのでは？なんて思ってしまう。



四谷川源頭へ滑る。（辻）



雪の砂漠の暴走族。（藤本）

休憩している人たちもいた。藪を避け、滑りやすそうなところを探しつつ、石跳川へと滑り込む。リーダーが思っていたルートは若干外してしまったようである。でも振り返ると、どこもかしこも良さそうな斜面。ちらほらと人影も見える。川沿いに緩やかに滑り下りたところで、藤本さんが車を取りにいくため、スキー場へと一人登り返してくれた。感謝！ネイチャーセンターへと向かう途中、湯殿山へのガイドスキーの団体にあった。小学生の女の子も交じっており、ちょっと驚きだった。

姥ヶ岳山頂は大勢の人で賑わっていた。北に伸びる木道の下に広がる斜面を目指し、湿性植物帯を痛めない為に、左から回りこむ様に藪をこいでその斜面に出た。しかし、とくに

に気にせず、木道から直接下りてきて休

その夜は月山荘のキャンプ場泊。志津で月山地ビール（瓶ビール！）を買い込み祝杯をあげた。残念ながら山菜はとれなかったもので、ふきのとうの天ぷらとバカ話をつまみに楽しい夜を過ごした。（記・片山）

【コースタイム】

行人小屋（8:00）～四谷川（11:00）～姥ガ岳（12:30/13:00）～自然博物館（15:00）



湯殿山を背景に姥ガ岳から石跳川へ。（植島）

5月5日 曇り時々雨

夜中に体を揺さぶられるような雷が数発轟き、雨音がテントを叩く。朝の天気が悪くても、午後の向かって次第に好天に向かうという予報を聞いて、出発を決行すると決めていても、この音を聞くときくじけてしまいそうになる。

朝起きると雨はやんでいた。薄く青空も見え、思ったより早く回復に向かっているか。六十里街道を少し入った地点より石跳川の右岸を登りはじめる。傾斜をほとんど感じない、緩やかな登りが続く。途中の皮松谷池、カワクルミ池を通過のチェックポイントとしてブス沼へ到着。ここから湯殿山への頂上に向けた登りにかかるが、辻君は靴づれがきつく歩くのがつらいようだ。結局、同行をあきらめて、皆が往復するのを待つことにする。

急登にかかり稜線を目指す頃、数台のスノーモービルその騒音がけたたましく響く。稜線に出るとガスに包まれ、雨も落ちてくる。視界は20～30mくらいと悪くなり不安になるが、頂上まではそれほど時間もかからず到着。

頂上より視界不良のまま滑走を始める。条件がよければ石跳川へ滑走の予定もあったが、視界の悪さで断念。登ってきた稜線コースをそのまま下山することにする、はずだったが下っている斜面が急すぎる。稜線手前の南側斜面に入ってしまったと思い、引き返すよりこのまま慎重に下まで下降することにする。ところが高度を下げるうちにガスが消えると、足下には石跳川が見えてきた。稜線の手前ではなく、稜線を越えて石跳川への斜面をくだっていたのだった。ブス沼には辻君が待っていることもあり、高度を合わせて水平移動で回り込む。

高度ぴったりで、待っていた辻君と合流。晴れていれば気持ちのいい、絶好のポイントのはずだったが、また雨がポツポツ落ちてくる。それでもここまでくれば安心、と軽く乾杯。後は緩やかな斜面を、思い思いのコースを取りながら、出発地点まで滑りを楽しむ。

自分以外は月山荘泊り。5日中には帰らなければならず、西川高速バス停

姥沢から石跳川へ。（片山）



まで送ってもらう。途中、月山酒造を訪ね、利き酒などして、その夜の宴会に心

を残しながら皆と別れる。(記・渡辺)

【コースタイム】志津キャンプ場 (7:00) ～ブス沼 (9:00) ～湯殿山 (10:30) ～志津キャンプ場 (13:00)

5月6日 曇り

合わない靴に泣かされた辻さんは「今日はもうスキー靴を履きたくない」と言って留守番することになった。辻さんに姥沢の駐車場まで車で送ってもらう。今回の滑り納めはリフトの東側の尾根をリフト乗り場までとそこから少し登り返して自然博物館までと月山を知りぬいたリーダーが計画を立てた。リフト終点から少し登ってロープをまたいで尾根上に立つ。正面におととい滑った斜面を満足気に眺めて携帯のカメラに納めた。

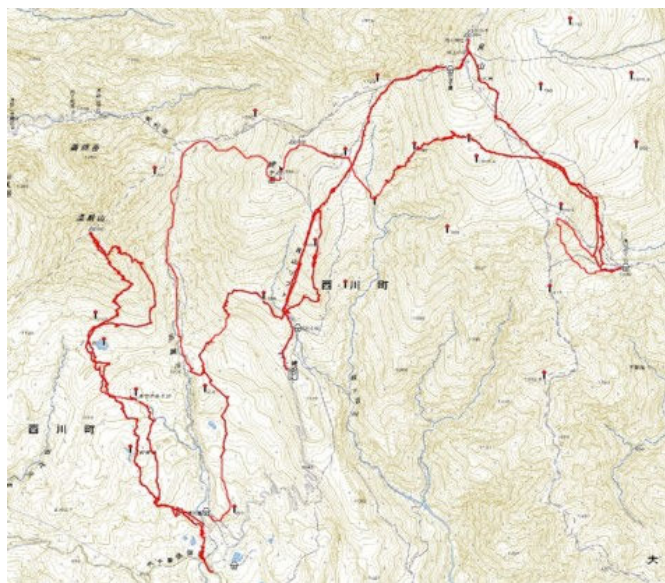


山菜そばで旅を締めくくる。

尾根上に滑った跡はあるが今日は私達3人以外誰もいない。快適、快適。ブナの樹の間を片山さんが楽しそうに滑っていく。リフト乗り場からスキーをザックに付けて姥沢右岸を10分程登り返すと昨日、奇しくも滑ることとなった湯殿山の斜面がすっきりと正面に見えた。りっぱなブナ林の間を石跳川に向かって至福の時が終わるのを惜しみつつ3者3様に滑り降りていった。おとといリーダーと別れた

地点からは沢沿いは今日はもう雪が落ちているようなので1015のピークの東側を巻いて滑った。辻さんとの約束の11時丁度に自然博物館に着いたので私と片山さんは「すご〜い！」とリーダーを賞賛したのだった。

とてもモダンに建て替えられた志津の仙擡屋さんの湯につかり、鍋で出てくる山菜そばを堪能してこの連休は締めくくられた。当初、片山さんと二人で計画を立てたときにはどうなることかとドキドキでしたが、月山ガイド顔負けの藤本リーダーに次郎さん、辻さんが加わって下さり思いっきり月山を楽しめ、思い出深い連休となりました。メンバーに感謝、感謝です。(記・植島)



【コースタイム】姥沢 (8:30) ～リフト上 (9:00) ～姥沢 (9:20) ～自然博物館 (11:00)

思えば13年前、春の月山に魅せられて以来何回訪れただろうか？ちょっとした慢心から見事なルートミスも犯してしまい恥ずかしい限りという場面もありましたが、とびきり楽しいキャラクターのメンバーとゆったりと4日間過ごせたのは何よりでした。

(記・藤本)

【地形図】月山、湯殿山